北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

英語受動構文

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 畑, 雅勝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00002901

英語受動構文

畑　　雅　勝

I．緒　言

Katz と Postal は An Integrated Theory of Linguistic Descriptions で，次のような仮説をたてた．それを要約したものが，(1)である。

(1) Transformations are meaning-preserving, in the following sense if two surface structures derive from exactly the same underlying structures and if their derivations differ only in that an optional transformation has applied in one but not the other, then they must have the same meaning.[1]

この仮説の意味するところは，もし英語の受動文が，変形によって，能動文と同じ基底構造から派生したものとすれば，次の二つの文，(2)と(3)は，同じ意味を表わすことになる。

(2) Columbus discovered America.
(3) America was discovered by Columbus.

II．復元可能性

ここで命令文(4)を考えてみると，(4)は(5)の you will を削除したものと考えられる．

(4) Wash your hands.
(5) You will wash your hands !

このことから，(4)は，(5)の you will を削除した後でも，その意味を保持しているものと考えられる．このことは，非常に重要な概念である．命令変形では，要素が削除されても，その本来の意味を失なわないことになる．この関係は(6)で示される。

(6) Wash your hands. ⇔ You will wash your hands.

もしも，変形が，Katz-Postal の仮説の通り，意味を変えないものであるならば，全て，変形によっ

て削除された要素は，復元可能であることになる．

復元可能の条件としてChomskyは次のように述べている[2]．

(7) Each major **categories** have associated with them a 'dummy' e. g., 'it' for abstruct nouns, 'someone' ('thing') and...this representation of the category is what actually must appear in the underlying strings for those transformations where the transform carries no indication of the actual terninal representation of this category in the underlying string...A deleted element is, therefore, always recoverable.

III. 短縮受動文

IIで述べたような現象は，英語の受動文にも生じる．

(8) a　John was fired yesterday.
　　b　Bill was questioned.
　　c　Mary was bitten.
(9) a　John was fired by someone yesterday.
　　b　Bill was questioned by someone.
　　c　Alice was bitten by something.[3]

(8) a～cは，(9) a～cの〈by phrase〉を削除した結果派生したもので，(8) a～cを短縮受動文という。短縮受動文が単に，〈by phrase〉を(9) a～cのような受動文から削除することによって派生したものか，又は，**Chomsky**及びEmonds[4]の主張するように，別の変形規則によって派生したものかは，議論の分かれるところである．Freidinは，(9) a～cより〈by someone〉や〈by something〉を削除しても，先に述べた，Chomskyの複元可能の規則に触れることはないと説明している[5]．その理由は，someoneもsomethingも共に，N → [N, ± Human] の典型的な〈Pronominal noun〉とみなされるからである．従って次の関係が成り立つ．

(10) John was fired yesterday. ⇔ John was fired by someone yesterday.

しかし，Emondsが述べているように，次の(11)と(12)とではこの関係が成り立たない[6]．

(11) Germany was defeated.
(12) Germany was defeated by Russia.

この場合，(11)は(12)から派生されたと考えられないのは，by Russiaが，削除に関する復元可能の規則に抵触しているからである。(11)は，必ずしも(12)から派生されたとは考えられず〈by phrase〉の生起に無限の可能性が含まれており(13)のa～cからも派生されたとも考えられるからである。

(13)a　Germany was defeated by France.

b Germany was defeated by the allies.
c Germany was defeated by her enemies.

IV. 〈Agent Deletion〉

受動文は，能動文と同じ基底構造に対して三つの変形操作を加えることによって派生される．その三つの操作とは，（i）主語と目的語の入れ換え，（ii）要素 be+EN の挿入，（iii）要素 by を移動された主語の左に挿入するということである。最近では，Chomsky 及び Emonds に従って，これ等の操作を二つの規則に分けている．従来は，受動文を単一の規則によって派生させようとしたため，短縮受動文の派生を説明することができなかった．従来の受動化規則を(14)に示す。

(14) Passive : X NP_1 Aux V NP_2 Y
1 2 3 4 5 6 ⇨ 1 5 3 be+EN 4 ϕ 6 by 2

(15)～(20)の短縮受動文を派生させるには，(21)—(26)に示された例文から，〈by phrase〉を削除したものと以前には考えられていた。

(15) Mary was **arrested.**
(16) Sam was praised.
(17) Susan was simply ignored.
(18) **Larry was viciously attacked.**
(19) Manfred was laughed at.
(20) **Igor has** never been **catered to.**
(21) Mary was arrested by someone.
(22) Sam was praised by someone.
(23) Susan was simply ignored by someone.
(24) Larry was viciously attacked by someone.
(25) Manfred was laughed at by someone.
(26) Igor has never been catered by anyone.[7]

そして，(21)～(26)に対しては，〈Agent Deletion〉の規則を適用する．この規則を(27)に示す．

(27) Agent Deletion : NP−X−be+EN−V−Y− $\left\{\begin{array}{l}\text{by someone}\\ \text{by something}\end{array}\right\}$
1 2 3 4 5 6 ⇨ 1 2 3 4 5 ϕ

従って，(25)の Manfred was laughed at by someone を派生するには，次のような手順を必要とした．

図 1

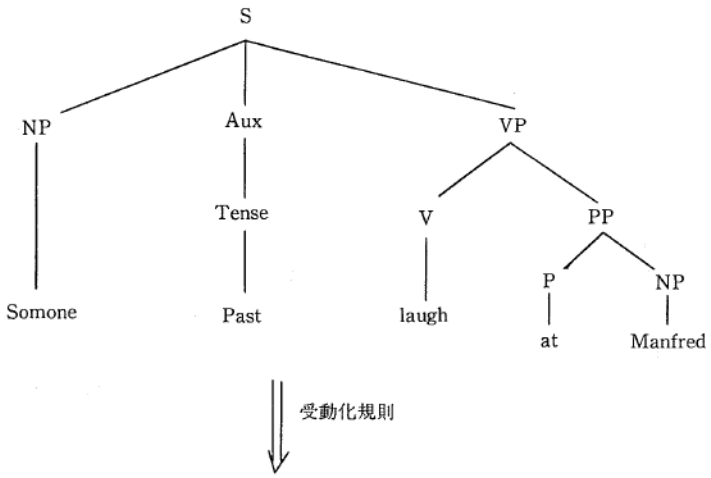

S
NP
Aux
VP
Tense
V
PP
P
NP
Somone
Past
laugh
at
Manfred
受動化規則

図 2

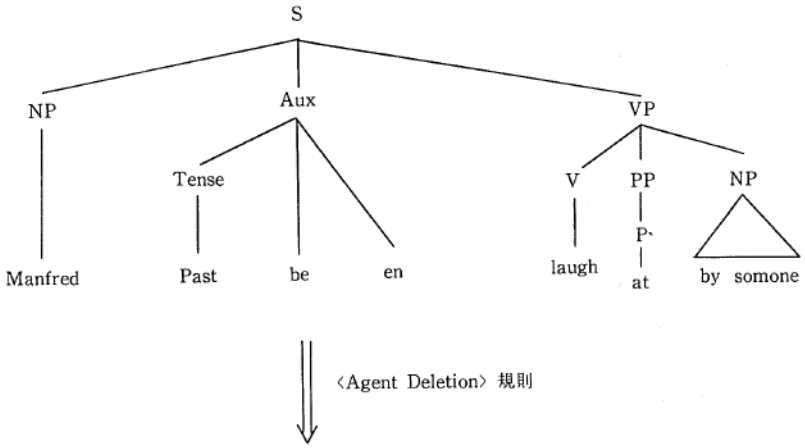
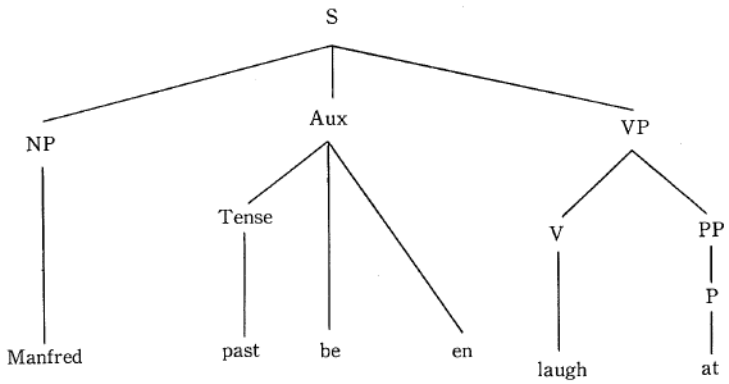

S
NP
Aux
VP
Tense
V
PP
NP
P
Manfred
Past
be
en
laugh
at
by somone
〈Agent Deletion〉規則

図 3


S
NP
Aux
VP
Tense
V
PP
P
Manfred
past
be
en
laugh
at

最終的には，〈Affix Hopping〉の規則の適用を受けて，(25)の Manfred was laughed at を得ることになる．

最近の理論では，受動化に関する操作を二つの変形に分けていることは前に述べた．これら二つの変形は，それぞれ，〈Agent Postposing〉と〈NP Preposing〉である．

〈Agent Postposing〉は，主語を by によって導かれる代役記号〈dummy〉の占める位置へ義務的に移動し，主語の位置に代役名詞句を残す．尚，代役記号は△で表わす．

(28) 〈Agent Postposing〉: X NP Y VP by △ Z
1 2 3 4 5 6 7 ⇨ 1 △ 3 4 5 2 7

〈NP Preposing〉は直接目的語を△の位置に移動し，同時に be+EN を V の前に挿入する．

(29) 〈NP Preposing〉: X △ V NP Z
1 2 3 4 5 ⇨ 1 5 3 be+EN 4 ϕ 6

次に(30)Mary was seen by Bill を派生させる手順を以下の図で示すことにする．

図 4

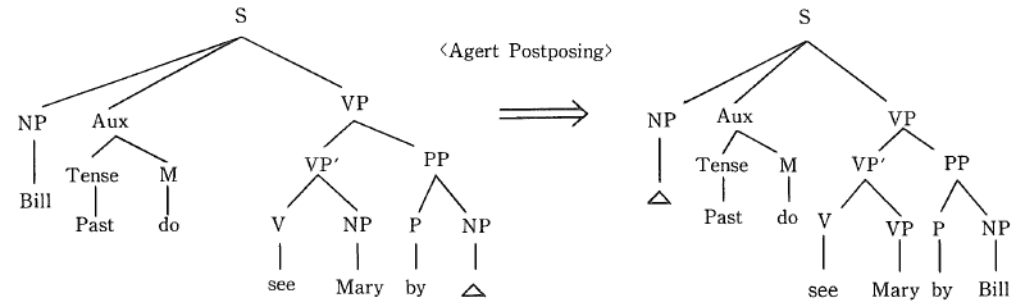
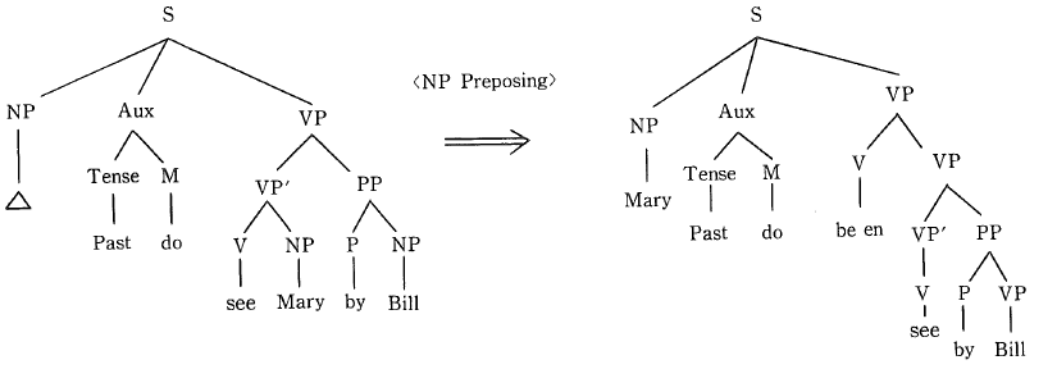


図 5



このようにして，最終的に，(30)Mary was seen by Bill が派生される．

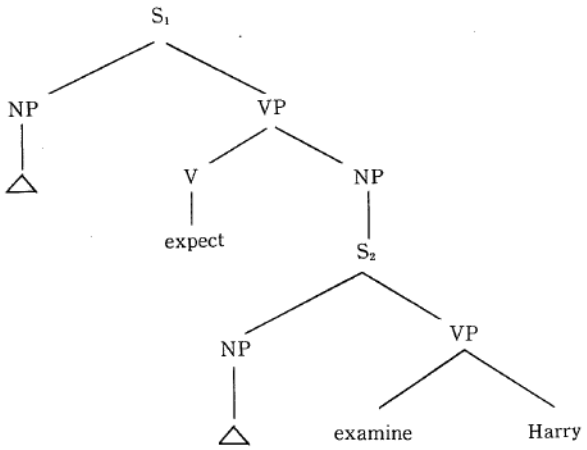
このような〈Agent Postposing〉と〈NP Preposing〉との二段階から成る操作の枠組の中で，〈短縮受動文〉の派生を説明することが出来る．今，**Mary was arrested.** を派生しようとすれば Culicover[8] の説明によると，

(31) Input : $_{NP}$[△] past do arrest Mary.
〈Agent P〉　〈適用しない〉
〈NP P〉　$_{NP}$[Mary] past do be en arrest ϕ
〈Do replacement〉　Mary past be ϕ en arrest ϕ
〈Affix Hopping〉　Mary # be + Past # # arrest+en #.
Mary was arrested.

しかしながら，この代役記号の理論は未だ首尾一貫したものとは云えず理論修正が必要と思われる．例えば，Freidin の説明によると，次の文(32)と(33)を代役記号を使って派生しようとすれば，それらの基底構造は図 6 のようになる[9]．

(32) Harry expects to be examined.
(33) Harry is expected to be examined.

図 6



(33)は，Harry を S_2 の主語の位置で一度，更に S_1 の主語の位置で〈NP Preposing〉規則を適用することによって得られる．(32)は，S_1 を受動化する必要がないので，(33)の派生よりも問題があるように思われる．いずれにしても，(32)～(33)は，同義ではないのだから，同じ基底構造をもつ訳にはいかない．かくして Freidin は次のように述べている．

(34) In other words, the use of the empty node in the derivation of truncated passives is not motivated empirically but rather is a way of retaining a transformational analysis of passives.

事実，仮に〈代役記号〉を彼って短縮受動文の基底となる主語のないことを説明できるにしても，(32)～(33)の派生に於けるように，〈Complement Subject Deletion〉のような又別の変形の規則を使わなければならなくなるのである．

V．受動構文についての其の他の問題

受動変形は，全ての他動詞に適用される訳ではなく，或種の動詞には適用されない場合がある．例えば，Chomsky も指摘しているように，様態の副詞類と自由に共起できないいくつかの動詞があって，これらは，受動変形を適用することができないとされる[11]．

(35) a The book costs eight dollars.
b ＊ Eight dollars are costed by the book.
(36) a The basket weighs a ton.
b ＊ A ton is weighed by that basket.
(37) a John resembles his mother.
b ＊ His mother is resembled by him.
(38) a The dress fits Mary.
b ＊ Mary is fitted by the dress.

しかし，これらの例は必ずしも，中間動詞に表われる特質とはいえない．例えば resemble は，或種の様態の副詞と共起することができる．

(39) ＊ He has a good house completely.

とは言えないが，

(40) He resembles his mother completely.

は，容認可能である．

又，次の例も興味深い．動詞 fit は，基底構造では，N［＋Human］と共起する場合，受動変形を受ける[12]．

(41) a John's new suit fits him.
b ＊ John is fitted by his new swit.
c The tailor fitted John (for his new suit).
d John was fitted (for his new suit) by his tailor.

更に(41)d は短縮受動文としても認められる．

(42) John was fitted (for his suit).

亦，動詞 want は受動変形で次のような制限を受ける[13].

(43) a　The police wanted John.
　　b　John was wanted by the police.
(44) a　Mary wanted that cake.
　　b ＊ That cake was wanted by Mary.
(45) a　John is **wanted.**
　　b ＊ That cake is **wanted.**

受動文と能動文の関係で，受動文は存在しても，それに対応する能動文のない例を Siegel は述べている[4].

(46) a　Antarctica is uninhabited **(by man).**
　　b ＊ Man uninhabited Antactica.
(47) a　The garbage was uncollected.
　　b ＊ Someone uncollected the garbage.

もし，先に述べたように，受動文と能動文が同じ基底構造から派生するものとすれば，(46)a を得るには，

(48)　Man－uninhabited－Antarctica－by＋△

という基底構造を考え，これに受動変形の規則を適用して(46)a を派生させようとするのは疑問が残るように思われる。それよりはむしろ

(49)　Man－inhabit－**Antarctica**－by＋△

に受動変形規則を適用し，

(50)　Antarctica－is＋inhabited－by＋**man.**

を派生し，更に否定変形規則を適用する方が自然のように考えられる。しかし，この否定変形規則によって派生される(51)と(52)とは意味が全然異なるものと思われる.

(51)　Antarctica is not inhabited by man.
(52)　Antarctica is uninhabited by **man.**

つまりこの違いは un と not との本質的な素性の違いによるものと考えられる．(52)を代役記号を使う変形操作で派生するよりは，un 自体がもつ素性から判断して，Siegel の主張するように uninhabited は［〔un－［inhabit］$_V$〕$_V$－ed］$_{ADJ}$ と分折される形容詞と考える方が妥当であると考えられるのである.

Siegel の説に関連して，受動構文と形容詞句とが類似しているということは明らかである．Wasow も述べているように，受動分詞が形容詞と同じ機能を示すのは，受動分詞が名詞句中に形容詞と同じ位置に表われるときである.

(53) John is the most *respected* member of the club.
(54) Harry had the *painted* box in his house.

しかしながら，形容詞には適用するが受動分詞には適用しない変形が多数ある[16].

(55) a John considered Mary to be very intelligent.
b John considered Mary very intelligert.
(56) a John seems to be very happy.
b John seems very happy.
(57) a Mary finds John to be kind.
b Mary finds John kind.

上の例は，所謂〈To Be Deletion〉変形であって，形容詞句の直前でのみ適用するが，一般には，受動分詞の前では適用されないと考えられている．再びCulicoverから例を上げると，

(58) a John considered Mary to be offended by **everything**.
b * John considered Mary *offended* by everything.
(59) a Mary doesn't **seem to** be attended by the **press**.
b * Mary doesn't seem *attended* by the press.

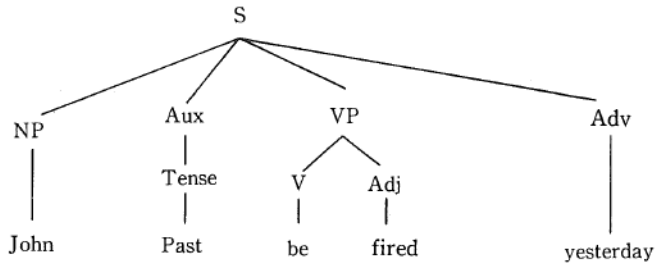
しかしWasowはこの〈To Be Deletion〉の規則を否定し次のような例を示している[17].

(60) a John seemed annoyed **at us**.
b John looked convinced to run.

従って(53)と(54)と同じように，或種の受動分詞は形容詞的であると考えられる．この故に，(61)のような文が直接変形によらないで句構造の規則から派生されるという考えも成り立つのである．

(61) John was fired yesterday.

図7



VI. 結　語

これまで生成文法の枠組の中で，英語の受動構文に付随する，いくつかの問題点を取り上げてみた．その結果，受動文を生成し且つ説明する完全な規則は，未だ完成していないように思われる．Gross も述べているように，受動変形の規則を設定するには，非常に多くの語い項目相互間についての検討が必要である．Gross の例を挙げると，動詞 inhabit は，受動文をもたないと言う[18]．

(62) a　Max inhabits Manhattan.
　　b ＊ Manhattan is inhabited by Max.

しかし，この場合，主語に複数又は集合名詞が表われると受動文が可能になるという．

(63) a　Rich politicians inhabit Manhattan.
　　b　Manhattan is inhabited by rich politicians.

生成文法は未だこのような現象に対して確実な答を出していないように思われる．受動構文が果たして深層構造をもつのか，或いは単に表層構造しかもたないのか，其の他の問題にも一層考察を深めていく必要があろうと思考するものである．

註

(1) Akmajian : An Introduction to the Principles of Transformational Syntax, p. 237. 1976.
(2) Chomsky : Current Issues in Lingiustic Theory, p. 71.
(3) Culicover の Syntax より引用した．Culicover : Syntax, 1976.
(4) Emonds. : A Transformationcl Approach to English Syntax.
(5) Freidin : The Analysis of Passives, Lg, Vol. 51, 1976.
(6) Emonds : *op. cit.*
(7) これらの例文は Culicover Syntax より引用した．
(8) Culicover : *op. cit.*
(9) Freidin : *op. cit.*
(10) Chomsky : Aspects of the Theory of Syntax, 1965.
(11) これらの動詞を中間動詞ということがある．
(12) Akmajian : *op. cit.*
(13) Akmajian : *ibid.*
(14) Siegel : Nonsources of Unpassive, in Syntax and Semantics, Vol. 2, pp. 301-317, 1973.
(15) Wasow : Transformation and the Lexicon in Formal Syntax, pp. 327-360, 1977.
(16) Culicover : *op. cit.*
(17) Wasow : *op. cit.*
(18) Gross, : On the failure of generative grammer. Lg, Vol. 55, 1979.

（本学助教授・札幌分校）